

2026年1月19日

金沢地方裁判所 御中

意見陳述書

原告 山先 敬子

私は、現在小松市で小さな居酒屋を営んでいます。38年あまり、能美郡・能美市の小学校や中学校に勤務をし、退職後2年目の2024年の6月に開店しました。自分の家の畠でとれた野菜を中心に、地元の食材を調理し提供しています。

## 1. 原子力発電の怖さを知る

私が原発に関心を持ち、その怖さを知ったのは『原発ジプシー』（堀江邦夫著 現代書館）からでした。蔵書には「1986年11月15日 第17版発行」と記載してあるので、教員2年目のことだと思われます。教職員組合の教研活動で平和学習に興味を持ち、広島・長崎の原爆の被害などを意欲的に学習していました頃です。原子爆弾と同じ核分裂を利用するという原発に対して、安全であるはずはない感じていました。また、この年にはチェルノブイリ原発の事故もありました。そんな時に手に取った本です。著者の堀江さんが一原発作業員として体験したことが書かれたドキュメンタリーです。読み進めていくと、その内容に衝撃を受けました。作業による被ばく、作業員が受けける差別的な待遇など、本当にこんな事が原発の中で起きているのかと思うと怖くなりました。「原発=科学=安全」と言われていることは嘘ではないかと、愕然としました。

社会科の学習では、子どもたちに原子力発電の安全性について考えるよう授業を組み立ててきました。水力、電力、原発それぞれの利点や問題点を子どもたち自らが調べ、自分の考えをまとめ交流するという授業です。子どもたちは、原発は廃棄物の処理の問題もあり、反対だという意見を持つ子が多くいました。しかし、この間ずっと、日本全国で原発は稼働し続けていました。

## 2. 東日本大震災・ボランティア活動から

2010年4月から2年間、教職員組合の仕事をすることになりました。学校とは違う仕事にようやく慣れてきた頃のことでした。2011年3月11日、東日本大震災が起きました。地震発生時は、県内の出張先で会議が行われていました。今までに感じしたことのない奇妙な長い揺れが続きました。一体何が起こったのか分からぬ状態で職場に戻ると、同僚たちがテレビに釘付けになっていました。津波の映像でした。少しずつ何が起きたのか、何が起きているのかが分かってきました。大きな地震が起き、津波が沿岸部を襲っている。胸が締め付けられそうでした。そして、なんと福島第一原子力発電所の爆発事故のため放射能漏れが起きている。やっぱり、原発は安全ではなかった。地震に耐えることができなかったんだ。悶々とする日が過ぎていきました。

5月2日から10日まで、岩手県大船渡にボランティア活動に行くことができました。大船渡に入ることができるのは、放射能汚染がなかったからこそです。能登半島地震でも全国から多くのボランティアが入ってくれましたが、志賀原発が事故を起こしていたら入ることなど不可能だったことでしょう。

大船渡のボランティアセンターがある市役所から、道路一本海側の町の風景は予想を超えたものでした。多くの家は形もなく、残っている家も一階部分は全くなくなっています。車が何台も重なって、転

がっていたり、線路もひしゃげていて、土砂に埋まつたりしています。ほんの数ヶ月前までは、電車や車が行き交い、人々が生活していた賑やかだった通りは何の音もしませんでした。私にはとともにこの風景を受け止めることはできませんでした。ここに住んでいた人たちのことを考えると苦しくて、その場に立っているのがやっとでした。とにかく入ってくる情報から心を隔てることで、感情を抑えて一日一日を送ることに精一杯でした。

ボランティア活動の内容は、海岸に集められた自動車のナンバーや車種を調べることや、全国から集められた支援物資の仕分けなど、直接被災者の方とお会いすることのない作業が数日間続きました。この時は、被災者の方にどんな顔で接したらいいのか、どう声をかけたらいいのか不安な気持ちが一杯だったので、作業をただ黙々と続けました。その後は、被災した家の床の泥出し作業や、家の中の物を運び出して洗浄したり、廃棄物を分別したりと直接被災者の方とお会いしての活動となりました。生々しい体験談も聞かせていただきました。首まで海水に浸かって1時間半鴨居につかまって九死に一生を得たと話される方もいらっしゃいました。

ボランティア活動が終わり、帰途につきました。大船渡で出会ったみなさんが、どうか元気で、生活を立て直していくことを願うばかりでした。テレビなどからの情報ではなく、自分の目で見たことや、直に被災された方のお話を聞いたことは、地震の被害の大きさを実感させてくれました。

### 3. 環境汚染（破壊）は命も生業も食文化も奪う

私がボランティアに行ってから、一ヶ月後の6月10日に福島県相馬市の酪農家の菅野重清さんが、「原発さえなければ」と書き残して自死されました。菅野さんは、事故前40頭ほどの牛を育てていた酪農家でした。水や土、空気が放射能におかされても自然と共に営む農業や畜産業、水産業は成り立ちません。地震や津波で大きな被害を受けただけではなく、放射能という目に見えないものにはばまれる生業。人が生きていくための食に関わる営みが、放射能の汚染によって奪われてしまいました。自然が放射能に汚染され、自然の一部である動物や人の命さえ奪ってしまったのです。

社会科の授業の中で、公害と環境についての学習があります。その中で、「水俣病」の学習が自分自身にとって大きなものでした。熊本県水俣市に「生産者グループきばる」という甘夏みかん等を生産している生産者グループがあります。授業で使用していた資料集に載っていた連絡先に電話をして、夏休みを利用して訪れました。海が汚染され「水俣病」が発生し、生業としていた漁業ができなくなった人たちが夏みかん栽培を始めました。水俣病患者だからこそ、自然環境に影響する農薬に頼らない農業をしていくこうとしているグループです。現地へ行き、患者である生産者の人の話を聞き、自然環境と食について改めて考えました。

### 4. 安全でおいしい食を

教員生活もあと残すところ数年となったときに、安全でおいしい食べ物を提供する仕事をしていきたいと思うようになりました。私が住んでいるのは川北町という手取川の流域の小さな町です。手取川の恵みを受け、肥沃な土壤、豊かな水がお米や野菜などを育ってくれる地域です。現在、お米は地域の専業農家に委託していますが、畑では義父と連れ合いが無農薬で野菜を育てています。その野菜を使い、安全でおいしい料理を一人でも多くの人に味わってもらいたいと思い、居酒屋を始めました。調味料もできるだけ控えめにして素材の持つおいしさを生かした料理を、手取川伏流水で作られた日本酒や地ビ

ールとともに提供しています。決して華やかな料理ではありませんが、「おいしい」と言って召し上がるお客様の存在が励みとなっています。

昨年暮れ、国土地理院が志賀原発の敷地に活断層が通っている地図を公表しました。北陸電力は活断層ではないと否定していますが、志賀原発のまわりには福浦断層や富来川南岸断層など、北陸電力がかつては否定していた活断層がたくさんあります。今後、原子力規制委員会はあらためて活断層の有無を確認するようですが、昨年の能登半島地震では規制委員会の審査も信用できないことが明らかになりました。志賀原発は本当に大丈夫なのか、ますます不安が募ります。

原発は事故が起きれば、豊かな自然環境を、命を、生業をも一瞬にして奪います。安全でおいしい食を提供したいという私の生き方は、原発依存社会とは対極にあり、原発のない社会の実現につながっていくと考えます。本裁判の一刻も早い結審を願い、志賀原発の一刻も早い廃炉を望み意見陳述を終わります。